

灰色の鳥

つちのこ。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

性格破綻者(?)な少女が死に、次に目を覚ましたらそこは侵蝕体が蔓延るパニグレの世界だった。特殊な実験により奇妙な能力を得てしまった彼女はこれから一体どうなってしまうのか。

作者の推しはリーフちゃんです。(聞いてない)

パニグレ何も知らない人でも分かりやすいように進行していきたいところ。。。

目次

闇と光

第1話	プロローグ	1
幕間		
第2話	幕間①	4
第3話	幕間②	8
第4話	幕間③	13
第5話	幕間④	17
第6話	幕間⑤	20
第7話	幕間・終	24
第1章	灰色の鳥	
	シアに関するデータ	30
第8話	15号都市	39
第9話	オモチヤと家族	45
第10話	歪なカゾクアイ	49
第11話	シアという人物	53
第12話	属性	57
第14話	特訓	61
第14話	ヨリミチ	65
第15話	代行者として	69
第16話	アツシュ	73
第17話	本質	77
第18話	赤潮	81

闇と光

第1話 プロローグ

侵蝕体という生きとし生けるものどころか機械までも敵が蔓延る地球。そのとある場所で激しい戦闘音が響き渡っていた。

「ほらほら。もつと踊れよ。」

——ズシャツ!!ズガガガツツ!!!

大きな剣を振り回す機械。その猛攻に前衛に出ていた隊長格の構造体が弾き飛ばされる。

謎の機械の翼が生えた巨大な機械体が襲いかかっているのはこの辺りで任務を遂行していた10人の隊。構造体9人と重厚な防護服を着ている1人の人物は窮地に追い詰められていた。

「ぐ… 指揮官を守りつつ撤…!!」

「させる訳ないじゃんバカなの?」

——グヂャツ!!

「が、アツ……」

人の意識が入った人型の機械…人はそれを構造体と呼んだ。たった今その構造体が何かに叩き潰され、チームを率いる隊長だった彼の中で循環する模擬血液…循環液が周囲に散らばる。

「ひ、ヒイツ…!」

「ばば、化け、物!」

「ヒヒヒっ…もつと踊れ…踊り狂えッ…!」

隊長格のエリート構造体を潰した化け物は機敏な動きでほかの構

造体達を文字通りグチャグチャにしていく。巨大な体躯から発せられる声はその姿に似つかわしくない甘美で、幼い子の狂ったような叫び声だった。

「あちやーやり過ぎちやったかな？」

無惨にも散ったこの場で唯一の人間であった指揮官という人物。そんな彼は巨大な機械体に頭を捻り潰されていた。

「キヒツ… まあいつか。エリートコーゾータイとかいう素材もゲツトできたしね。」

普通の構造体とは一線を画す性能を持つエリート構造体。空中庭園の技術力を持ってして造られたエリート構造体は当然機械として見れば宝の山であった。

「ふんふんふん…。あ、そうだった。アツシユも良く頑張ってくれたねー?」

まるで自分自身を褒めるかのように優しい声で自分の頭を撫でる機械体。そこから分かる通り彼女の声と機械体は同一の存在ではなく別物であった。

「——面白いオモチャね。」

「… 貴女はだアレ?」

——ギイイイインツツ!!!

問いかけると同時に真っ赤な刀と黒色の大剣が衝突した。

「私? 私の名前はルシア。このオモチャ… 私が貰っても良いかしら

「？」

「だあめ。」

「そう。なら無理にでも奪うまでね。」

「… また全滅ですか。」

「そのようだな。あれでも優秀な指揮官とその仲間たちではあったはずだが… そこまで強いのか…。」

「いっその事大々的に殲滅してしまった方が宜しいのでは？」

「… あれを使うのはまだ早い。ここは彼らに出撃してもらおう…。」

「… グレイレイブン隊、ですか。」

「ああ。新任指揮官も首席で優秀と聞く。もう1チームも派遣しよう。グレイレイブンにはサポート役に徹してもらおう。」

「… 分かりました。その通りに。」

空中庭園。侵蝕体に地球を奪われてから人類は宙へ逃げるように空中庭園と呼ばれる巨大な生活圏を創り出した。それでも全人類が収容できるはずもなく地球には数多くの人間が取り残されている。

「… グレイレイブン。彼らならきつと…。」

逃げ出した人類のトップ層の目標はひとつ。それは…

「——きつと地球を取り戻してくれるはずだ。」

黒き世界に一筋の光が流れ始めた瞬間だった。

幕間

第2話 幕間①

私は死んだ。

生まれた時から虐げられ、互いにアイスルヒトとやらがいる両親のサンドバッグとして生きること早16回目のハル。サクラというキから落ちるハナビラ？が私の顔に当たる。

「これが死ぬってことか…。」

母は何か些細でも嫌なことがあったり、男に振られる度に私を「アタのせい」と言いながら殴り、父はギャンブルに負ける度に「お前のせいで」と言いながら殴る。

私の世界はこの建物の一室だけだった。外という世界は見るだけしかできず、毎日のように掃除をさせられ、カップラーメンという食べ物の残り汁を啜る毎日。たまにおいしい食べ物の残り物があったからなんとか生きてこられた。ちなみに掃除しかすることが無いから部屋はいつも綺麗だった。ふくろに集めたゴミは母が持つて行っている…。私という存在を外に出したくないのだろう。

当然ガッコウというところにも行ったことは無い。家から出れば当然殴られるから行けるはずもない。

「ヒヒヒ…。」

今日も父に殴られ、運悪く…運良く？その場で意識を失ったが次に目を覚ました時には背中に感じる痛みとフカフカな何か。そして真っ白なトリという生物が私の体の血が飛び出しているところを啄んでいる。たしか…カラスと言ったか？でも窓から見ていたカラスの色とは違う。

「キレイ、ね…。」

「カアツカアツ!!」

血塗れの口。ダメじゃない…私はゴミなんだから。ゴミは食べちゃダメなんだよ？私はまあ別だけど。

「キヒ…ゴホツ!!…はあ…へへ…キレイな子…ほん、と…。」

「——ぐちやぐちやにしくなっちゃう。」

——バサバサバサツ…！

ああ、飛んでいく…。

私を食べていたカラスに気を取られて気にしていなかったが、多分今私は外にいる。クサという緑色のモジャモジャが床にたくさんあって、うねうねしてるキというものが私の周りにたくさん立っている。

「これ、が、キ。あれが…ソラ？」

さつきのカラスが飛び去っていったあのソラ。外に暮らす人間達に見つからないよう見ていたひび割れて濁った窓越しじゃない澄み渡った青いソラ。

キレイなものばかりな外の世界。私には勿体ない存在…。何はともあれ外の世界に勝手に入ってごめんなさいって感じ。

それと同時にこのキレイな世界の何もかもを壊してみたい。オモチャみたいに自由に遊んで…。自由に捨てて…。ああ、これがユメってことかな。私には絶対できないこと。ユメってのはそういうものだって母と父に散々言われてきた。お前のユメは絶対に叶わないってね。

… まあそれを聞く度にユメってなに？って思ってたけど。死ぬ時に理解するのってどうなんだろう？

「はあ…………… はあ……………」

息を吸うのが早くなる。この後私はどうなるんだろうね。母や父から「死ね」って言われてきたからこの眠くなるのが死ぬってことは分かるんだけど死んだあとはどうなるのかな。

私はふとこれまでであったことを思い返しながら眠りについた。

『ピピッ…ピピッ…ピピピピピッ…!!!』

「侵蝕率72%！もうダメです!!」

「クソツ!!またか!!」

「早く隔離しろ！」

——ドガアアアンツツ!!!
——ズドドドドドツツ!!!

「ん、う…?」

目を開く。ここが死んだあとの世界？さつきまでの体の重さが無くなつて…。もないみたいだけど…。
むしろさつきよりも気持ちが悪い。

「うぷ…。おええええツツ!!!」

口から大量の液体が飛び出てくる。血も混ざってるみたい。

「ここは…。どこなんだろう?..」

私はソラが真つ黒なちよつとうるさい世界に来てしまったようだった。

第3話 幕間②

「…？」

重すぎる体をなんとか起こして座る。そこで私は体に変なことに気がついた。

「こんな手じゃなかった…。」

いつも傷だらけだった白い手は真っ黒なモノに。両手どころか私の体の至る所にその硬いモノがくっついていてる。

「ゴホッ… 硬い…。」

手をにぎりにぎしてちゃんと動くかどうかとも確認する。うん。ちゃんと動くね…。まるで人形というモノみたい。人間ができる動きは全部できそう。

「動くならいつか…。」

特に痛い訳でもないし動かせない訳でもない。ただ体が重くなっていること以外は問題ない。

「…どこどころだろ。」

次に気になったのは今いる場所。今までの記憶の中になくキレイな世界とは真逆のグチャグチャの世界。キレイなキヤクサは無く、ソラも真っ黒。キレイな建物も無く、その全てが崩れている。

「テレビでも見たことない。」

父と母が出かけている時に見ていたテレビというもの。ニュースというものを見ていてもこの景色は見たことがない。まあ父と母がいる朝や夜、あとはドヨウビとニチヨウビ以外のお昼にしか見れないからもしかしたら他の時間に見るとあったのかもしれない。

「広い…：なあ…：。」

そんなキレイとは無縁な世界でも私の知る世界よりも広い。立ち上がって見ても果てしなく広く、先が見えない。あの先には何があるんだろう…：。

「この世界にもキレイなモノがあるのかな？」

「ギシヤアアアツツ!!!」

「っ!？」

——ドスンツ!!

何かの叫び声?が聞こえた瞬間私はそれに押されて転んでしまう。背中にのっっている何かは私の首に何かしているようだがあんまり…：というか痛くない。

——ブチツ!ギヤリギヤリツ…

頭に響くような気持ち悪い音。首から血が流れ出すのを感じる。どうやら私の首も硬い何かでできてるみたい。

「はアツ!!!」

——ズドンツ!!!

「ギヤアアアアツツ!?!?!?」

「またもや首元で叫ばれたと思いきやその謎の何かは私の背中から居なくなつた。」

「大丈夫か?」

「ダイジョウブ: : ? ダイジョウブってなに?」

「はあ? 首噛まれてたろ?」

「: : カマレテ: : ?」

「まさかお前言葉が分かんねえのか: : ?」

「ん。」

「聞きなれない言葉達。その意味を尋ねると変な顔をされる。何か変なことを言つたかな?」

「はあ: : 生き残りの構造体みたいだったから助けてみたが、まさか廃棄されたやつだとはな: :。忌々しい空中庭園め: :。」

「廃棄: :」

「コーゾータイ。タスケテミタガ。ハイキ。クーチューターエン。ハイキは廃棄だろう。廃棄物って聞いたことがあるもん。ゴミって意味だよね? 私と一緒に。」

「: :。おい。」

「?」

「俺についてくる気はあるか?」

「: :。?」

「あー: :。つまり一緒に来るか?」

「一緒: :。?なんで: :。?」

「: :。あーもう良いからついてこい!」

「あつ: :。」

私の黒い手を握って引つ張る目の前の人間。父と母以外に初めて触られた。私の手と違って…。なんだか…。ポカポカする。

「…ここが今日から暮らすお前の家だ。そういえば聞いてなかったな。お前の名前は分かるか？名前。」

「ナマエ？」

「あー…。なんて呼ばれ…。んー…。俺の名前はヒジムだ。」

「ヒジム…？」

自分を指さしてヒジムと言う人間。ナマエ…。つまり私の名前は「ゴミ」ってことかな？父と母からはゴミってよく言われてたから。次に多かったのがお前とかそこらへん。

「私はゴミって言われてた。あとお前とか。」

「お、おう…。相当やべえな…。」

変な顔をする人間…。じゃなくてヒジムは私より大きい。顔があるのが高くて見づらい。父も同じぐらいだったが怖いという感情はなかった。

「そうだなあ…。じゃあ今日からお前はシアだ。単純だが『幸せ』から取ってみた…。なんだか大変そうな人生だったらしいからな。」

「シア…。私のナマエ…。シア…。」

シア、シア…。うん。いい響き。

「ヒジム。」

「なんだ？」

「ありがとう。」

「…おう。」

こうして私は「ゴミ」から「シア」になった。

「そうと決まればまずは勉強だな。」

「ベンキョー?」

「そう。お前にh——」

「シア」

「: シアには常識がない。これから一緒に暮らすにしても意思疎通できないと互いにキツいだけだからな。おま: シアには知識を付けてもらう。俺の知る全てを教えてやろう。」

「: ?」

よく分からないけど頭を手でぽんぽんされた。

第4話 幕間③

あれから5年。私はヒジムから様々な知識を教えてもらった。文字の読み書きはもちろんこの世界の常識を何も知らなかった私にヒジムは根気強く1から教えてくれた。

「なあシア。もうすぐ定期整備の時期じゃないか？」

「そうだね。研究室借りるね？」

「おう。気いつけるよ？」

「うん。」

定期整備。これは人間の時には無かったものだが、構造体になってからは定期的に自分の体の整備をしている。

3年前までは構造体に詳しいらしいヒジムが地下のボロボロな研究室で体の隅々までチェックしてくれてたんだけどヒジムの左腕が動かなくなっちゃったからそこからは代わりに私がやる事になった。最初は変なところを外しちゃったりして大変だったけど今では見なくてもできるようになった。

それともう1つ……。

「……侵蝕率68%……ちよつと高めかも。」

私の体に蔓延る侵蝕体……。パニシングとも呼ばれるそれはAIによって最適化された機械体を侵蝕して化け物にする……。当然それは体が機械である構造体にも危険と言える。さらに言えば普通の人間が誤って体内に取り込んだ場合でも命の危険がある。それほど侵蝕体は危険なものなのだ。

特殊な機材を用いてパニシング濃度を測っているのだが、いつもよ

り高い。いつもは50%ぐらいだから約20%分ぐらい上がってる。

「…ヒジムには見せられないな。」

かつて彼が言ったことを思い出す。

『いいか？普通の構造体なら10%侵蝕されれば苦しみ出す。それに耐えられなければもの数秒でパニング濃度は100%になるだろう。本当に大丈夫か…？苦しくないか…？』

『う、うん…分かったから揺らさないで…。』

『お、おうごめんな…。でも心配なんだよ。46%だぞ…。？何も無いはずがないんだよ…。』

10%でも苦しくなる侵蝕体。今ではもう70%まで上がったちゃった。意識海の方も気持ち悪い黒い何かがあるのは分かるんだけど私が近づくと少しだけ距離を取ってくるんだよね…。あ、意識海っていうのはその名の通り意識の海のことだよ。言うなれば心の中…。って私は認識してる。通常ならキレイな世界らしいんだけど私の中は侵蝕体だらけで真っ黒な世界だ。それでも私には影響がないのが不思議でしようがない。

「どうだった？」

「うん。意識海は安定してたよ。」

「そっか…。それは良かった。」

いつ襲ってくるか分からない侵蝕体から身を守るために作り出した武器の整備も終わって外に出るとソワソワした様子でヒジムが待っていた。前に心配しすぎで研究室に突入してきたことがあったんだけどその時私が驚いちゃってちよつとした事故が発生したからかそれ以来整備が終わるまでは入ってこないようにしてるらしい。私としては侵蝕率を見せたくないからその方が良いけどね。

「っ！ヒジム私の後ろに!!」

「な、なんだ!？」

——ドガアアアンツツ!!!

急に地下室の扉が破壊された。ヒジムに覆いかぶさった私の背中に飛んできた瓦礫が当たるが構造体なので問題ない。それよりヒジムは……大丈夫そう。

「……この辺りも戦闘範囲内に入っちゃったみたいだね。」

「……そうか……。この森の奥なら大丈夫だと思っていたんだがな……。」

さっきの爆発はきつと空中庭園のモノだろう。扉の上に立っていた侵蝕体を爆破したらしく扉諸共壊れてしまった。

「……ここもダメそうだね。」

「ああ……。また引越しだな。」

ここ5年間毎年のように引越しをしている。空中庭園の戦闘範囲内から逃げるためだ。ここ最近はどんどん拡大していつて逃げる頻度も早くなっていく。

「ちっ……。忌々しい空中庭園め……。今更地球をどうしようってんだ……。」

「……。」

多くの人を残して飛び去った空中庭園。侵蝕体に逃げ惑う人々に銃を突きつけ、牽制した空中庭園は多くの人々の恨みの対象となっていた。……ヒジムもまた目の前で銃を突きつけられた1人。いくらキ

レイな心を持っていてもこの行動は衝撃的で忘れられないのだろう。

「準備はできたか？」

「完璧」

「それじゃあ行くぞ。」

崩壊した入口に侵蝕体の反応はない。チラツと目視でも確認してみたがやはりいない。いないことを確認して勢いよく飛び出す私と後続くヒジム。普通の人間であるヒジムは銃弾1発でも食らってしまうと最悪死んでしまう。だからこうして構造体の私が出で走るのだ。こうすることで何かあればヒジムを守る。

しかし

——ヒユウウウツツ…!!

現実

——ドゴオオオオオオオオオンツツ!!!!

非情だった

第5話 幕間④

——ドガンツ!!

「か…ガハッ!ぐ、うう…。」

至近距離に着弾した爆弾。前を走っていた私とその後ろを走っていたヒジムの中にそれは落ちた。爆発の衝撃波で私は大きく吹き飛ばされ、近くの建物の瓦礫に衝突する。

全身血塗れになりながら、震える体を無理やり起こし、爆発地点に向かう。

「……。」

そこには小さなクレーターがあり、私はその奥に飛び散った血を見つけた。見つけてしまった。ぐちゃぐちゃになってしまったそれを。

「ヒジ、ム…。」

5年間ずっと一緒に暮らしてきた義理のお父さん。私に1から物事を教えてくれた先生。家に侵入してくるパニシングを倒すために連携した戦友。そして感情の何たるかを一緒に考えてくれた親友。

「あ、あう…ふ、うう…。」

頭から流れる血と一緒に目から零れ落ちる何か。これが涙。ヒジムは死をもつてしてもなお教えてくれる。これが悲しみ。

もはや顔の半分が消し飛んだヒジムの亡骸を抱きしめて泣き喚く。

こんな気持ちは初めてだ。こんなにも… 苦しいものがあつたのか…。拭っても拭ってもその涙は止まることはない。

「ヒジム… ヒジム… … まもれなくて… ごめんね…。」

そう言ってもヒジムは何も言わない。謝罪はこれが初めてではない。なんどもなんども失敗しては謝ってきた。でも… ヒジムはその全てを笑って許してくれた。だから… また笑ってよ…。

「あああああ ああ ああ ツツ!!!」

この21年、生きてきて今日が初めて泣いた日だった。

「ヒヒ… … なんて、なんて儂い命…。」

しばらく泣いていると冷静になってきて自分の泣きっぷりに思わず笑ってしまう。やはりキレイなモノは神とやりに摘み取られてしまうのか。

「あは、アハハ…。」

じゃあキレイなモノもキタナイモノに変えてしまえば私から離れない…？ だってそうだよね？ 神だってキタナイモノを摘み取ろうとしないもんね？

「キヒヒ… … ひじむ… … わたし、がんばってみるよ…。」

神が最も嫌う… … そんなキタナイ世界。それを目標にがんばろう。

ヒジムの弔いのために…。

『俺にはな… 娘がいたんだ。ちょうどお前『シア』… シアよりも少し高い背丈のな。生きてたら今年で16歳だっただろうな…。ん？ シアも16だった？ そんなまさか…。嘘だよな？ だってどう見ても10歳も行ってな——』

『ちっせえ頃の俺の夢は機械整備士になることだった。でもその夢もお偉いさんの言う事でパーになっちまった。』

『… 今の夢？ ははっ… 会ったばかりのお前『シア』… シアに言うことじゃないと思うが今の夢は——「シアに幸せになってほしい」とどな。』

「… 私のアワセ。キヒ、ヒ… シアアワセってなんなんだろうね。」

『それはおいおい見つけていけばいいさ。少なくとも俺はおm… シアと出会えて幸せ者だよ。』

「私に、見つけられるかな。」

パサパサに乾いた目元を拭い、腰に装備していた剣を引き抜いた。

「ヒジム。この剣を通して見てて」

——ズシャツ！

剣を地面に突き刺してその場から離れる。例え離れていても私の意識海はその剣と共にあるから。

「私がこの世界をキタナイモノに変えてやる」

第6話 幕間⑤

「ギシャアツツ!!」

「わざわざ来てくれてありがとね。」

——ズバンツ!!

「ギャツツ——!?!」

——ズシャツ…!!

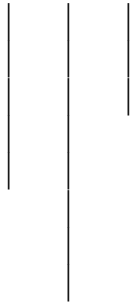
侵蝕体に侵され、我を失った機械体が私に襲いかかるがサブで持っていた大剣を横に一閃して胴体を泣き別れさせる。下半身を失ってもなお蠢くソレの頭に大剣を突き刺した。

「ヒヒ…素材おいしいなあ…。」

鉄クズに成り下がった機械体は素材の宝庫である。私のサブ武器の大剣を強化したいんだけどいかんせん素材がね…。だからパニングを使って強化しようかなって。今までヒジムが近くにいる意識海にいるパニングとは距離を置いてたけど、彼亡き今はそうも言っていられない。自分の中にいるからね。

「ここら辺なら大丈夫かなー?」

崩壊した建物郡の中心部にある比較的崩壊していない建物の中に入る。大剣を壁に立てかけて自分ももたれ掛かる。



「……………」
「……………」

真つ黒な何かが蠢き、覆い尽くす世界。もはや通常の意識海で見られるはずのキレイなピンク色の空は見られるはずもなく、私の意識海はことごとくパニシングによって黒く染められていた。

…なんてカッコつけて言ってみただけど要するに侵蝕率100%ってこと。あの日から僅か10日で均衡を保っていた私の意識海は完全に白旗を上げた。

「… ちょっと落ち着いたから向き合う時間を取らせてもらったよ… 貴方は何者？」
「……………」

相も変わらず蠢くだけでスンともいわないパニシング。かといって私が近づこうとすると距離を取ってくる曲者。

「貴方は何がしたいの？」
「……………」
「んー… そうだなあ… じゃあ私が言うね。私はね、世界をキタナイモノにしたいの。キタナイモノになれば誰も私から離れないでしょ？」
「……………」

いやしくもヒジムと初めて会った時の構図と似ている。ヒジムが私で私がパニシングで… その時に初めて名前をもらったんだっけ。

「… 私の名前はシア。よろしくね。」

「…。」

— そう言って手を差し伸べてみる。が、やはりただ蠢いているだ—

— ズモモモ…。

私の手を覆うパニシング。これはよろしくって言ってるのかな？… それとも利害が一致したとか。

… 何はともあれ協力関係になれそう。

「…………… クフ… キヒヒ…！」

体に巡るパニシング。ずっとのかかっていた体の重さは逆転し、まさになんでも出来そうなほど体が軽くなった。

「へえ… こうやって出せるんだ…。」

体から溢れ出す力を絞って手から放出させるイメージを試してみる。すると黒いモヤモヤが手から放出された。これがパニシング…。いつも意識海でしか見てこなかったから新鮮だなあ…。

「… おお。ちゃんと武器も強化できる…。」

侵蝕体に侵された機械体は制御が効かず狂うのと引き換えにとんでもない力を手にする。強固であったり凄まじい攻撃力であったり。空中庭園の構造体が手を焼くほど強くなったりする。ならばそのパニシングを武器に使ったらどうなるのか。そう考えて武器にパニシングを流し込んでみたんだけど…

——ピシピシツ…パキツ…!

大剣がひび割れ、木つ端微塵になってしまう。ん…？あれ？浮いてる？なんでだ？

粉々になったはずの大剣は小さな欠片になって私の周囲に浮かんでいる。つんつんと触ってみても落ち——

——ガチャンツツ!!

「うひゃっ!」

あまりの音にびっくりして思わず手を引っ込めてしまう。恐る恐る欠片達を見てみるとそこには粉々になる前の大剣が浮遊していた。

「お、おお…?」

柄の部分を持ってみてもさつきみみたいに壊れない。刃の部分も金属の拳で叩いてみても壊れない。

「ふふ…あははっ…!」

パニシング…面白いじゃん。

第7話 幕間・終

——ヒュツ…ズバンツツ!!

「ギャアアツツ!!」

——ズガアアンツツ!!

「グイイイツ!!」

「ふう…」

機械体の素材やパニシングで強化した大剣を振るって侵蝕体を破壊する。たくさん素材が手に入って嬉しいな。

「…ただいまあー」

誰もいないボロ家の扉を開けて光の無い部屋の奥に向かう。

「今日で完成しそうかな？」

侵蝕体から取り出した素材達を床にばら蒔いてとある機械体の前に立つ。

「…アツシュ。」

構造体である私の体の構造をそのままにヒジムの巨大な体躯を真似て、1から作り出した人型の機械体。AIなどはなく、パニシングに寄生させるつもりだ。

「さつき狩った侵蝕体の中にトランシーバー持ちがいたんだよね。」

アツシユの頭の中に改造したそれを埋め込み、私の首にも同じものを装着する。

「あ、あ、あー。」

『あ、あ、あー。』

「うん。大丈夫そうだね。」

『うん。大丈夫そうだね。』

目の前の機械体から私の声が発せられるのを確認して首の装置を外す。

ヒジムが死んでから2年。1年前から機械体を造り始めたけどできる限りキタナクするように造っている。そうすれば壊されないだろうから。

「…アツシユにはこれを授けるよ。」

『…。』

2年間お世話になったサブ武器の大剣。これで私の武器はもう無くなってしまったがもちろんあとで造るつもりだ。

「今日の実験が終わったら実戦投入しようか。」

そう言いながら私はパニシングを放出した。

——グググ… ギギツ… バギンツ!!

機械体が金属音の悲鳴を上げてパニシングを取り込んでいく。壊れたならそれまで。壊れなければそのまま使う。

「… 貴方はどっち。」

『……………』

真つ赤な骨組みが見えるほどひび割れたけど、人間で言う肉の部分には金属が浮遊しながらくつついている。手足もちよつと伸びているように思える。

「ふうん？体勢はそうなるんだね。」

背が高すぎて大剣を杖のようにして床に突くアツシユ。膝も少し折れて、だいぶ猫背だから頭は私の頭の少し上にまで下がっている。

「…じゃあリンクしてみるね。」

意識海を通して私とアツシユをパニングで繋ぐ。こうすることでアツシユの体を私が動かすことができるのだ。

——ガシャンツ…

少しだけ動いてみて、特に違和感はなかったのでリンクを切断する。これで実験は終了した。あとはこのアツシユでどこまで戦えるかを見ないとね。

「…早速実戦投入しようか。」

私は部屋の奥に隠れて再びリンクした。

「…こちらベルンド。目標地点に到達。指揮官どうしましょう。」

『ああ暫しの間待機しておけ。』

「了解。」

作戦地域にてとある構造体達が任務を遂行していた。彼らの目標

は重要な拠点となるだろう都市の奪還であった。

「総員侵蝕体に気をつけつつ待機だ。」

「はっ！」

現在は上司である指揮官からの待機命令が出たことにより彼らはビルの中で隠れていた。

「… 案外すぐ終わりそうじゃないか？」

「たしかにな。でも油断はするんじゃないぞ？」

「… おい、なんか変な感じしねえか…？ なんか… 体が重い気がする…。」

「おいナギ」

「はっ。パニシング濃度の計測をします…。っ！ち、近くにとんでもない反応があり——」

「総員退避イ!!」

——ズドオオオオオオオオオオオンツツ!!!

彼らが四方八方に逃げるのと同時にビルが崩壊する。しんとした空気の中、砂煙が晴れた。そこに立っていたのは巨大な体躯と大剣を持つ異形だった。

「なん、だ… あれは…!!」

「新種の侵蝕体ですか…!？」

「恐らくそうだろう…。総員散らばって撤退せよ！」

気配からしてとんでもない化け物であることを理解した隊長構造体は少しでも被害を減らすために隊員達を散らばらせた。

「指揮官、こちらベルンド。現在新種の侵蝕体と遭遇し、撤退中。今

データを送ります。」

『助かる。なっ…これは…』

「この化け物について何かわかるのですか？」

『いや…初めて見るな…。とにかく1人でも多く生き残ってくれ。』

「はっ。」

「それは無理な話だけどねー？」

「は…？—あがつ!？」

—ギリギリ… ミチツ…

可愛らしい声のする方を向いた途端隊長構造体が宙に浮く。さっきの化け物侵蝕体が左手で首を掴んでいるのだ。

「は、あ…ぐっ…!」

「苦しいねえ?でも逃がさないよ?… 貴方以外の全員ぜんぶ壊しちゃったから。キヒヒ…」

「ぐ、き、さまあつ!!!」

隊長構造体はなけなしの力で腰の銃を引き抜いて化け物の顔面目掛けて発砲した。

—パアーンツ

—ガギンツツ!!!

「ごんねん。」

—グヂャツツ!!

ミシミシと悲鳴を上げていた首はあっという間に潰される。それを行った化け物は循環液が手に付着するのも気にせず素材を持ち

帰って行った。

第1章 灰色の鳥

シアに関するデータ

●型の説明

○攻撃型

攻撃を重視した機体。さまざまな攻撃手段及び攻撃を補強するスキルを持つ。

○装甲型

装甲を重視した機体。敵の誘引、防御を重視したスキルを持つ。

○補助型

補助を重視した機体。機体回復や戦闘サポートなどのスキルを持つ。

○増幅型

サポートに長けており、小隊の全体的な作戦効率を増幅させる能力を有している。

○先鋒型

瞬間火力を重視した機体。強力な瞬間火力及び攻撃スキルを有する。

——プロフィール——

「S」 CLASS

○シア

偏った人生経験からキレイなモノは自分から離れてしまうと理解した彼女。キレイなモノをキタナイモノに変えるため彼女は決意した。

○型式

増幅型

○属性パラメータ

物理20% 闇30% 雷25% 氷25%

○特徴

- ・増幅：場にいる時相手の属性耐性を下げつつ味方を強化する。
- ・多属性：多くの属性を有しておりどの作戦でも有利を取れる。
- ・瞬間火力：増幅と合わせて相手の体力を大きく削る。
- ・モードチェンジ：違った武器を持たせることで全く異なる戦闘を行う

○推奨装備

武器：アンチテーゼ（大剣・闇）、ライトショッカー（長銃・雷）、朱樺（刀・氷）

- ・アンチテーゼ（シア専用武器）（幕間でアツシユに装備させた武器）
攻撃：513
- 会心：121

闇属性ダメージが30%上昇、攻撃を加えると20%の確率で相手の闇属性耐性を半減させる。持続時間10秒で冷却時間0.5秒。

- ・ライトショッカー（シア専用武器）
攻撃：476
- 会心：329

雷属性ダメージが20%上昇、攻撃を加えると30%の確率で相手をスタンさせ、雷属性耐性を30%ダウンさせる。冷却時間5秒

- ・朱樺（ルシア・鴉羽推奨武器）
攻撃：463
- 会心：234

氷属性ダメージが15%増加。3チェインすると全てのダメージが10%増加。持続時間10秒

○推奨意識

●闇属性メインの場合

- ヒジム：4点セット
- ダーヴィン：2点セット
- ・ヒジム

4点セット

狂乱モードに入ると闇属性ダメージ+30%。必殺技―最後の弔い―のダメージ+30%。狂乱モードが終了するとエネルギー10pt獲得する。

2点セット

闇属性ダメージ+5%、相手の属性耐性減少効果+5%

・ダーヴイン

4点セット

省略

2点セット

シグナルをショットする度に、追加ダメージ効果が3%上昇。持続時間は4秒。効果は最大5回まで重ねられる。重ねて発動すると持続時間がリセットされる。

●雷属性メインの場合

ハイゼン：4点セット

フルル：2点セット

・ハイゼン

4点セット

攻撃時、25%の確率で半径3.5m以内の目標に100%の雷属性ダメージを与える暴雷が発動する。暴雷を受けた敵は雷属性耐性が8%低下する感電状態となる、持続時間は5秒。クールダウンは5秒。感電状態の敵を攻撃すると20%の確率で全ての感電状態の250%の雷属性ダメージを与える連鎖感電が発動する。クールダウンは8秒。

2点セット

全攻撃力が3%上昇し、雷属性の与ダメージが7%上昇。

・フルル

4点セット

省略

2点セット

必殺技の発動に必要なエネルギーが20%減少。シグナルを

ショットすると追加でエネルギー20%を獲得。

●氷属性メインの場合

辰積原：4点セット

ダーヴイン：2点セット

・辰積原

4点セット

攻撃を加えると30%の確率で相手を氷結状態にする(持続時間5秒)。氷結状態の敵を攻撃すると20%の確率で吹雪が発生して半径3m範囲内に420%の氷属性ダメージを与え、敵を氷結状態にする。クールダウンは8秒。氷結状態の敵は移動速度20%、氷属性耐性8%。

2点セット

攻撃力が3%増加、氷属性ダメージが7%増加。

・アンチテーゼ装備時(しばらくこの装備なので今回はこれだけ)
シア・反世(SSS+：Lv.80)

戦闘力：8091

生命：10151

攻撃：2109

防御：1142

会心：817

●赤シグナルLv.18

「穢れし天使」

パニシングを込めた一撃を地面に放ち、自身を中心に大範囲の敵にショットしたシグナルの数に応じて245.41%/450.63%/652.78%の物理ダメージを与える。3チェインの場合は物理ダメージが闇属性ダメージに変わる。

●黄シグナルLv.18

「死の救済」

パニシングを込めた剣を前方に縦横一閃させて前方大範囲の敵に

ショットしたシグナルの数に応じて265・69% / 480・42% / 712・63%の物理ダメージを与える。特に真正面の敵には2倍のダメージが入る。3チェインの場合は物理ダメージが闇属性ダメージに変わる。

●青シグナルLv. 18

「安らかな死を」

パニシングを放出して、自身を中心に大範囲の敵をショットしたシグナルの数に応じて闇属性耐性—25% / —50% / —75%の衰弱状態にする。3チェインの場合はエネルギー10pt獲得する。

●アクティブスキル

・呪縛Lv. 18

通常攻撃：アンチテーゼと左腕で連続攻撃をして、合計で952・24%の物理ダメージを与える。

・必殺技—最後の吊い—Lv. 18

必殺技：エネルギー100ptを消費。コアパッシブ中にしか発動不可。前方1体の敵を拘束して滅多斬りにし、1254・12%の闇属性ダメージを与え、機械体アツシユを召喚する。必殺技が終わるとコアパッシブが強制的に終了する。

・断罪Lv. 18

QTE：大剣で斬りつけて合計で507・63%の闇属性ダメージを与え、斬りつけられた敵の闇属性耐性を—40%させる。

・増幅型Lv. 18

全体の隊員が出撃キアラ切り替えで出撃時に10%、増幅型の対応する属性ダメージ追加効果10%。10秒持続。

・解放「極」

戦闘開始時、シグナルを3つ獲得する。

●パッシブスキル

・頭によぎるトラウマ

コアパッシブ：通常攻撃とシグナルショットで狂乱値を獲得。狂乱値が満タンの時に攻撃ボタンを長押しすると狂乱モードに移行し、100%のダメージ軽減効果を獲得。狂乱モード中は通常攻撃速度が

2倍になり、シグナルも1チェインで3チェイン分の効果を発揮するようになる。

・隊長―狂った果実―

戦闘中常に敵の属性耐性―10%、増幅型の追加ダメージ効果+5%

・苦しいな (SS class到達時解放)

パッシブ：通常攻撃速度が1.5倍になる

・もうちよつと力出してもいいよね？ (SSS class到達時解放)

パッシブ：コアパッシブの狂乱値充填効率が100%増加。隊長―狂った果実―の「戦闘中常に敵の属性耐性―10%」が―「戦闘中常に敵の属性耐性―20%」になる。

・わたしががんばるよ (SSS+ class到達時解放)

パッシブ：コアパッシブ狂乱中の攻撃力が100%増加、必殺技―最後の弔い―のエネルギー消費が半減する。

※別の装備に変わったら上記の内容も全部変わります。

【データ】

シア・反世

就役：1ヶ月

起動日：6月10日

身長：149cm

体重：39kg

循環液型：AB型

精神年齢：23歳

【資料】

No.001

個体識別名：シア、故人ヒジムによって名付けられた名前。機体名は反世、増幅型。【削除済み】が開発した別ベクトルに特化させた機体であったが、失敗したことにより外装はパニング異重合となつてし

まった。驚異的な軽さと硬さを誇り、パニシングそのものを操ることができる。

No. 002

「キレイなモノはキタナイモノに」彼女の幼い頃からの劣悪な環境による歪んだ性格からこのように考えている。【削除済み】の戦闘にて空中庭園に回収されたが未だにその性格は歪んだままである。

No. 003～006

信頼度Lvアップでアンロック

【秘話】

反世の秘話1

色んな武器が使えるほど器用だが戦闘面以外ではポンコツでポンコツの子と呼ばれている。

反世の秘話2

趣味がないかのように見受けられたが、実は機械いじりが大好きで構造体：【削除済み】と共に何かを造っている様子がよく見られる。

反世の秘話3～12

信頼度Lvアップでアンロック

【ボイス】

・構造体加入

「ん？貴方がシキカン？私はシア。シアって呼んで…よろしくね。」

・Lvアップ

「貴方がやらなくても自分でやったけど…」

・昇進

「シヨーン??」

・進化

「おー…なんか強くなった気がする…。」

・スキル強化

「パニシング濃度が…上がった…?」

・装備

「ふーん？今日はそれなんだね？」

・ 小隊に編入

「今日もいいモノ拾えるといいな…。」

・ 隊長に任命

「私がタイチヨー？… タイチヨーって何？」

・ 任務達成

「んえ？もう終わったの？」

・ 日常会話1

「シキカンってキレイだね。ぐちやぐちやにしてもいい？」

・ 日常会話2

「ねえ見てシキカン。銃造ってみた。」

・ 信頼度上昇1

「シキカン… 何がしたいの？」

・ 放置1

「あれー？動かなくなっちゃった？お人形さんみたいだね。」

・ 長時間オンライン1

「… コーゾータイより動いてない？」

・ ログイン1

「おはよシキカン。」

・ 長時間オフライン1

「… 久しぶりだねシキカン。あなたも私から離れたのかと思っちゃったよ。」

・ シェイク1

「ふら… ふら… ？」

・ 連続タップ

「くすぐりたい… これ流行ってるの？」

・ 活躍度MAX

「今日はもうおしまいだね。」

・ 戦闘開始

「私の素材…。」

・ 戦闘1

「ほらほらもつと踊れ！」

・戦闘2

「この程度なの？」

・戦闘3

「ぜえんぶ素材にしちやうよ？」

・必殺技

「アツハツハツハツハツハツ!!!」

・被弾

「…痛くない」

・重症

「まだやれる」

・戦闘不能

「ごめん…ヒジム…」

・支援

「助けは必要？」

・QTE

「これでどう？」

・戦闘終了

「キヒヒ…素材がいっぱい…！」

その他

信頼度Lvアップでアンロック

以上がシアちゃんのステータス(?)です。実装されたらどうなるかの妄想ですのでネタバレは武器ぐらいですかね。

第8話 15号都市

「… 指揮官…。パニシング抑制血清は、まだありますか…？」
「ごめんもうない…。」

「… 計算通りですね。このままでは為す術なくやられてしまいます。指揮官… 痛覚遮断の許可をお願いします。」

「… どうしても？」

「どうしてもです！」

「… わかった許可する。」

百数十体の侵蝕体を屠り、私の目の前で倒れた黒髪ロングの構造体、ルシア。彼女の横腹からとめどなく流れる循環液は彼女の黒い服にシミをつけ、地面にも流れ出す。苦痛な顔がとても心苦しいが痛覚遮断は人間モデルから離れてしまったため最終手段であった。まさかここで使うとは思わなかったけど…。

「… さあてルシアが起きるまで頑張りますか…。」

意識リンクして痛覚遮断をするため少しの間ルシアは気絶する。その間も絶えず侵蝕体は襲ってくる。今いるのは私とルシアだけ。動けるのは私しかない。

——パァンツ!!

もう撃ちきった銃に再び弾薬を装填し発砲。

「ギャアアツ!!」

「ちっ…。」

少し仰け反らせることはできたがそれでも進行が止まることは無い。

「ギャアアツツ!!」

「っ…！ふっ！」

——パンパンツツ!!

飛びついてきた侵蝕体をギリギリで避けて横から体当たりする。大きく仰け反った侵蝕体に再び発砲。

「ギャアアツツ!!!」

「まづっ…!?」

「——指揮官はやらせない…!!」

——ズバンツツ!!

黒い刀を振るい、私の背後から襲ってきた侵蝕体を一刀両断するルシア。その鬼神と言ってもいいような顔付きは私でも少し怖かった。

「はアツ!!」

——ズババンツツ!!

「ぬるいッ!!」

——ズシヤツツ!!

「ルシア!…ルシア!!」

「っ… 指揮官…。」

「もう敵はいないよ? 落ち着いた?」

「はい… 申し訳ございませんでした。」

「ううん私は助かったからいいんだけどね…?」

我を失ったルシアをなんとか宥め、リーフ達に連絡を取る。

「リーフ。そっちは大丈夫?」

『はい指揮官。そろそろ合流しましょうか…。リーもそれで良いですよね?』

『はい。』

「分かった。」

別行動していたリーフ達と合流して次の目標地点に向かわなければならぬ。今回与えられた任務は15号都市の奪還。地球奪還作戦の拠点としてこの都市が1番都合がいいのだ。だから失敗する訳にはいかない。

「ルシア…！酷い傷ですね…。」

「ええ。ですが痛覚遮断をしているので大丈夫です。」

「そこまですたのですか…。」

「はあ… 作戦を変えた方がいいのでは？指揮官？」

「リー…。」

「ううん。このままで行く。もう少しだけ付き合ってくれろ？」

「もちろんです指揮官。」

都市の中心部に向かう。補給部隊と合流できればいいが期待はできない。しかしルシアと対照的なリーフの真っ白な長い髪が揺れるのを見て私はほつと息を着く。俄然として危ない状況だが張り詰めていても危ない…。落ち着かないと。それに最近は何にやらここ第15号都市で暴れ回る何かがいるらしいからね。先輩と別行動してるからもし遭遇したら撤退しろって聞いている。

「ここなら小休憩できそうですね。」

「うん。リーフ、ルシアの傷見てくれない？」

「分かりました。ルシア、患部を見せてください。」

「本当に大丈夫なんです… 指揮官の言う通りにします。」

「——あら、仲良くお医者さんごっこかしら？」

「誰ですか…!!」

コツコツと音を立てながらやって来たのは腰まで伸びる白髪の女性。救援部隊がやって来たのかと一瞬思ったが、あんな構造体は見たことがない。

「パニシングの反応があります！あれは侵蝕体です!!」

「指揮官下がってください…！」

「…ルシア。」

「っ！なぜ私の名前を…！」

「過ちはここで潰さなければ…。」

「過ち？一体なんのこと——」

——ガギイイインツツ!!!

「くっ…！」

敵の真つ赤な刀とルシアの黒い刀が金切り声を上げながらぶつかる。

「なぜ貴女の顔が見えないのですか…！」

「僕達は見えているんですがルシアは違うのですか？」

「パニシング濃度の上昇による影響ではないみたいですがルシアの意識海が揺れています…！」

「弱いわね。」

「あぐっ…!?!」

敵はルシアの刀を弾いたと思ったたらその刀を掴んでルシアの左腕を貫いた。瓦礫に縫い付けられたルシアはもがいて脱出しようとするも抜けられなかった。

「痛覚遮断させられたのね。なんて哀れな。」

「ルシアから離れて…！」

——パンツ!!

——ギイインツツ!!

撃った弾が刀で斬られ、瓦礫と中に消えていく。

「… 貴女はこの子の代わりに前に出れるのかしら？」
「出れるに決まってる！」

サバイバルナイフを抜いて、敵と相対する。

「何やってるんですか指揮官！下がってください!!」

「ごめんねリー！」

「勇気は認めるわ。」

一瞬で距離を詰められ、あつという間にナイフを奪われる。

「あああアツツ?!?!?」

「あの子と同じ痛み…それでも？」

「ぐううっ…！」

ルシアと同じ場所にナイフを刺される。

「それでも、やってやる!!」

「っ!!」

根性でナイフを抜いて敵に斬り掛かる。それでも普通に受け流されるが私が叶うとは思っていない。

「指揮官と私達は繋がっています!!」

「ちっ…なるほど…ね。」

私の時間稼ぎが役に立ったようでなんとか抜け出したルシアが敵の背後から斬りつける。しかしそれでも傷1つ与えられぬまま距離を取られてしまった。そうして彼女は暫く無言で私達を見たと思えば壊れた窓から何処かに消えていった。いったいなんだっただろう…。

「それにしても…」

「言いたいことは分かります。」

「リーも？さっきの彼女・・・瓜二つだったよね」

「——ルシアに」

第9話 オモチヤと家族

「…また来たの？」

「ええ。そのオモチヤが欲しくてね？」

「あげないに決まってるじゃん。」

目の前の白髪 of 構造体…名をルシアと言ったか。彼女は前にもアツシユが欲しいと勝負を仕掛けてきたのだ。前の戦闘では互いに有効打が与えられぬまま終わってしまったが、今回ばかりは許さない。

「仮にアツシユを倒したとしてもまだ私がいる。」

「益々面白いわね。」

——ギイイイインツツ!!!

赤い刀と黒い大剣が交差する。互いにパニシングを放出して牽制し合うが同程度なのかあまり効果はない。

——ブオンツツ!!!

横一閃してルシアを弾き飛ばし、パニシング濃度をさらに上げる。向こうも同じように刀に炎を纏った。パニシングって変換できるんだ…。私もいつか設備が整ったらやってみたいな。

ってそんなこと言ってる場合じゃなかった。

「ふっー」

——ギヤイイイインツツ!!!

炎と闇のぶつかり合い。辺りが真っ白になって視覚モジュールが塗りつぶされる。徐々に視界が開けてくるとそこにルシアはいない。パニシングを放出して居場所を探ると彼女もパニシングを放出しながら全速力でどこかに向かっていた。

「逃げられると思ったら大… まさか…！」

ルシアが向かっている先にあるのは本体の私がいる無駄にパニシングを放出していたのは本体を探すためだったのか！

今すぐ向かいたいがアッシュでは間違はなく追いつけない。慌ててリンクを切断して四つん這いで武器を探す。

「あつた… これだ——」

「まさか声の通り可愛らしい子だったとはね。」

予備として造っていた剣の柄に手を伸ばそうとするも私の首に真っ赤な刀が当てられそれは叶わなかった。

「ふふ… 貴女も昇格ネットワークに選ばれたのね。持ち帰ったらルナが喜びそう。」

「…。」

未だに刀を首に押し付けられて牽制されているため迂闊には動けない。しかし…

「そんなんで拘束したつもり？」

「…！」

刀が動き出す前にそれを掴み、近くの剣を拾う。

「… 第2ラウンドってやつ？」

「… そうなるわね。」

アツシユのことも心配ではあるが所詮侵蝕体の塊。最悪空中庭園に奪われても目の前のルシアに奪われても構わない。…なんて見栄を張って見たがそんな事になったら私には耐えられそうにない。アツシユはヒジムに次ぐ第2の家族。奪われることなどあつてはならない。

「戦闘中に考え事かしら？」

「うぐつ…！」

——ズガンツ!!

剣を弾かれて吹き飛ばされる。いくらパニシングで強化しようともルシアの力の前に私は無力だった。

「弱い。」

「ぐ、あ…。」

押し倒され、首に足を押し付けられる。今度こそ何も出来ないな…。

「今は眠りなさい。」

「なん、で…。」

パニシングを流し込まれ、私の意識海はその濁流に飲み込まれた。

「… 指揮官。目の前にあの化け物がありますがどうなさいますか？」

「… 包囲して攻撃だ。あわよくば捕らえろ。そうすれば空中庭園に大きな貢献ができるだろう。」

「了解。」

だらんと項垂れる化け物機械体アツシユ。シアとのリンクが切れたことによつて無防備を晒していた。

「総員攻撃開始！」

——ズドドドオオツ!!!

——ガギイガギイインツツ!!

「攻撃停止！それを回収せよ。」

銃やら剣やらで攻撃されるアツシユ。それでもなお無抵抗なことに気がついた指揮官は攻撃を辞めさせ、回収することにした。

「一応剣の方も回収しておけ。」

「指揮官！剣が消えました！」

「は？何を言っている…？」

「わ、私にも何が起きたのか…。」

「まあいい。これが手に入っただけでも儲けものだ。グレイレイブんと合流して帰るぞ。」

「」「了解！」「」

なんの景色も移さないアツシユの視覚モジュール。機械体アツシユは空中庭園に回収されてしまったのだった。

第10話 歪なカゾクアイ

『よくできたな…普通なら習得に5年はかかるものだが…次はこれだけでもやってみるか?』

『ん。』

『おいおいマジかよ…お前『シア』…シアは天才だな…。これもできちまうのかよ…自信なくすぜ全く…。』

『…やらない方がいい?』

『そんな訳ねえだろ。お…シアのやりたい通りにやればいいさ…シアは俺の娘みたいなものだからな。』

「う…ん…?」

懐かしい夢を見た気がする。とても心地よくてキレイで…私にはもつたいなくて…惨たらしくぐっちやぐちやにしたくなる…そんな夢。

「起きたかしら?」

「っ!」

体を無理やり起こして声の人物と距離を取る。私は警戒しながら声の人物…ルシアに問いかけた。

「…私をどうするつもり?」

「別にとつて食おうって訳じゃないわ。ルナが気に入ったもの。」

「るな…って誰?」

「…貴女と似た存在よ。」

少し言い淀んだのを聞き逃さない。きっと彼女の弱点がそのルナ

とやらなのだろう。それよりもここはどこだろう…？

「ここは私達の拠点。貴女、私達の仲間にならないかしら？」

「…無理やり連れてきたくせに？」

「それもそうね。」

「…貴女の目的は？」

「私はルナがいればそれでいいわ。」

「…そう。」

家族愛ってやつか…キレイなモノだね。ぐちゃぐちゃにしたいくなっちゃう。家族と言えば私のアツシユはどうしたんだろう。ルシアのことだから一緒に持って帰ってきたと思うんだけど近くに反応がない。

「…アツシユをどこにやったの？」

「アツシユ？あああのオモチャね。さあ？知らないわ。私が戻った時にはもう居なくなっていたもの。」

「っ、っ…!？」

アツシユがない…？じゃ、じゃあどこにいったの…？わ、私のアツシユ…あつしゅ…

「あ、ああ…」

「落ち着きなさい。パニシングが漏れてるわよ。」

動揺でパニシングが漏れ出してしまいがそんな事はどうでもいい。アツシユを探さないと…

扉の前に立つルシアを睨みつける。

「そこを、どいて…！」

「退いたらどうするの?」

「決まってるでしょ。探しに行く。」

「なら駄目よ。アツシユとやらの居場所には心当たりがあるわ。」
「だったら——!」

「——空中庭園。」

「っ…ま、まさか…」

「そうそのまさかよ。今の貴女じゃ到底行けない場所にあるの。」

「あ、あう…アツシユ…」

「…私たちの計画に『空中庭園を落とす』ものがあるわ。」
「…」

「もう一度問うわ。私たちの仲間にならないかしら?」

「……………分かった。」

アツシユ…アツシユ…待って…今助けに行くから。

「…それで?私は何をすればいい?」

「ふふ…そう焦らなくても仕事は与えるわ。貴女には整備をやってもらおうわ。今はガブリエルに頼んでくれるけれど貴女も知識と技量はあつてしょう?」

「分かった。そのガブリエルとやらの場所に案内して。」

「もちろんよ。その代わりと言ってはなんだけど報酬として私は貴女に剣を教えるわ。」

「っ…ほんとに?」

「確かにあのオモチャ…アツシユは強かったわ…でも硬いだけ。ただ大きい剣を振り回してるだけだったわ。」

「うっ…」

「生憎、私は刀しか振れないから実戦形式でしか教えられないけれどね。」

「…それでも助かる。」

「…取引成立ね。」

きつと私は… 私達は空中庭園と戦うことになるだろう。その時のために、少しでも実力は付けておかなければならない。アツシユのためにも…。

「貴女の名前は？」

「…シア。」

「シアね、よろしく。」

「うん。」

気持ちの整理ができてから整備をする施設がどれほど整っているのかを楽しみにする余裕ができた。これからしばらくは仕事と自分の成長に時間を使おう。

「まずはルナに挨拶ね。」

「…はやく整備室行きたいんだけど…？」

「仲間になったんだから挨拶はしなさい。敵と看做されて攻撃されたくはないでしょう？」

「う、分かった…。」

楽しみが減った…。

第11話 シアという人物

「… 私はシア。貴女がルナ？」

「ええ。貴女がシアね？姉さんから聞いてるわ。」

「ん。よろしく」

「ええ」

握手しながら挨拶を交わすルナとシア。互いに無表情だが悪感情は抱いていないようだ。…とはいえ会って早々にパニシングをぶつけ合うのはどうかと思うけど。

「… それじゃあガブリエルのところに案内するわ。」

「ん。」

後ろから小走りでついてくる彼女の歩幅に合わせて私もゆっくり歩く。ガブリエルのところまでは少し時間が掛かるため彼女の観察ができる。

「… 貴女も失敗作なのね。」

「… シツパイサク？」

「いいえなんでもないわ。」

私の妹であるルナと一緒に。構造体になるための空中庭園で手術を受け、失敗の後パニシングに吞まれ、それを制し生き残った代行者。

「… シツパイサクってなに？」

「覚えていないのね。」

どうやら記憶もないみたい。意図的に記憶を削除されたか… た

だの事故か… どちらにせよあんな【削除済み】共は記憶の容量を圧迫するだけ無駄。

「… 貴女も空中庭園には気をつけなさい。」

「はあ？」

こてんと首を傾げるシア。実験体になる前はどうか生活していたのだろうか。私たちと同じような生活をしていたのか？それとも裕福だった？

「… 施設、どんなところ？」

「… そうね。色々整ってるわよ。空中庭園の人間共が残した全てがそこにあるわ。」

「ふうん… いいね。」

「もうすぐ着くわよ。」

———プシユウウツツ…！

重い扉が横に開き、もう一枚の扉が現れる。その扉を抜けた先に彼は居た。

「… 姉君がこちらへ何の御用でしょう？」

「この子、シアを預けに来たわ。」

「… 貴方がガブリエル？」

「… 左様ですか。ム？もしや自分自身を改造したのですか。これは素晴らしい…」

白仮面の上に丸いメガネを掛けた黒いコートと中折れハットを被った長身の男、ガブリエル。機械に詳しい彼にシアを預けるならふさわしいだろう。

「気に入ったようね。」

「ふむ…… 貴女の腕は見て分かる通り…… ならば受け入れましよう。」

「ありがとうガブリエル。」

「それではシア様。ついてきてください。」

「頼んだわよ。」

「勿論でございます。」

私から離れ、虚ろだった目に僅かな光を宿しながらガブリエルについて行くシア。彼女は機械弄りが好きなのかもしれない。

「ルシアありがとう。またね。」

「…… ええ。」

またね。何度その言葉を聞いてきたか。何度その言葉を発した人物が死んでいったか。だけど昇格者たるシアならいくらでも会う機会はある。

「…… まるで妹が1人増えたみたいね。」

「へえ？ 君もそういう気持ちになるんだねえ？」

「…… ロラン斬るわよ。」

「相変わらず物騒だねえ？…… ところであの子は誰だい？」

「…… 昇格者にして代行者のシア。ルナと似て非なる力を持つ者よ。」

「ふうん…… ルナ様の白髪とあの子の灰色の髪。背丈も同じぐらい…… 似てるところは多いみたいだね。」

「…… そうね。」

凄まじいパニシング濃度を持つ彼女はルナのそれに匹敵する。力のベクトルが違うみたいだけどそれは造られた機体が支援方向に寄っているからだろう。

「あの子……裏切らないと良いね？」

「……さあ？どうでもいいわ。」

「……君さっき妹みたいって言わなかったっけ……？」

「耳腐ってるんじゃないかしら？」

「そんな訳ないからね？もしかして——」

「そろそろ黙らないと首吹っ飛ばすわよ。」

「おー怖い怖い……分かりましたよーだ。」

感情をあまり感じ取りにくいシアという人物。貴女の心の中には何があるのかしら？

第12話 属性

「…。」

「…。さあシア様。まずは貴女様の体の整備を致しましょう。」

「なんで？」

「…。私に気になるのはもちろんの事、変な改造をしているのであれば大変危険ですから。」

「ふうん。分かった。」

服を脱いで腹部や腕に付けている諸々の装甲を外す。

「…。なに？」

「…。いえ、こちらの機械の中に入ってくださいシア様。」

「ん。」

「一度眠らせませんが抵抗なさいませんよう。」

「別に眠らせなくてもいいよ。」

「…。わかりました。」

ヒジムの研究室にそんな物は無かったから麻酔無しで自分の体を弄っていた。そのお陰か自分で付ける傷の痛みはあまり感じ無くなっていて。それと実の父と母に殴られていたせいか相手から与えられる痛みにも慣れていて。

——プシユウウツ!!

——ギギツ…

機械が動き出し、私の胸を抉る。そこに私の改造した黒いコアが入っている。ガラス越しに見えるガブリエルの顔が近づいていることに気づく。仮面を被っているからどんな表情かは分からないけど興味津々って感じ。

『シア様素晴らしいです…。この負のエネルギーはルナ様に負けずとも劣らない…。』
「…。」

程なくして検査は終了し、私は解放された。ガブリエルは手に持っている本に何かを書いているようで暇になった。

「ねえ。」

「なんででしょうか。」

「私もルシアみたいに火をぶわくって出してみたい。」

「… ふむ。恐れながら申しますが、先程の整備を経てシア様の火への耐性はそこそこであるとは分かりました。恐らくシア様は極寒地帯や感電に耐えうる機体にと造られた存在だと推測致します。」

「… 火は出せないの？」

「… そうなりますな。パニシングを変換させたものを出力して火を出すことは可能ですが機体が耐えられないかと。」

「…………… そっか。」

じゃあ他ならできそうってことだね。例えば氷とか。氷をぶわくってやるのは想像がつかないな…。あとは雷をぶわくってして…。私ぶわくばかり言ってるね。

「… ここは自由に使って良いですので私はこれで。」

「良いの？」

「勿論でございます。何かあれば言ってくださいませ…。ああ、忘れていました。この部屋の奥にいる侵蝕体達もご自由にどうぞ。」
「分かった。」

そう言っただけでガブリエルは黒いコートを翻して自身の造っている機械の元に向かっていた…。あの機械大きいなあ。

「… 氷は想像がつかない…。」

どのようにして自分を改造すれば氷を出せるようになるのかが分からない。だからとりあえずは雷をぶわくつて出すことを目標に頑張っっていこうと思う。

「… 蓄電器持ちは… あ、いた。」

——ゴギンツ…！

ウジャウジャいる侵蝕体の中から感電地帯にいても蓄電器で吸収して耐えられるやつを探したら割と手前の方にいたのでそいつの首をへし折って回収する。

「… 武器もない…。」

アツシユに預けたあの黒い大剣。また武器も造らないといけないなあ…。

と、そう思っていると…

——ズモモモ…

「わわっ…。」

私の手の影から現れるパニシングの塊。それは大剣の形を象って完成した… アツシユに預けた私の大剣だ。

「… この大剣パニシングになっちゃったんだ。」

でも確かに壊れるまでパニシングを込めたからパニシング濃度が

高い……。アッシュはパニシングをあまり込めておらず普通に体の形は保っているレベル。回収できる程パニシングに侵されていないようだった。

「……いつか返してもらおう。」

そのために、まずは目先の目標から達成していく。私の体に蓄電器を改造した物を埋め込めばなんとか出せるんじゃないかなって思うんだけどどうだろう。

「……ア……。シア。」

「んっ……。ルシア？なんでここに？」

「貴女に剣を教えるって言ったから。」

「そうだった。」

気がつけばものすごい時間が経っていた。ガブリエルの方も無言で造っている。ルシアが呼ぶまで私は多分寝ずに作業し続けていただろう……。前はヒジムが止めてくれてたっけ……。

とりあえず蓄電器を改造して容量を上げて、蓄電したものの電圧を極限まで高くする機関を埋め込めた。あとは私の体に埋め込んで配線をして出力装置を埋め込むだけ……。それだけなんだけど1人じゃ厳しいし時間も掛かる。また今度やろう。

「……シア、早く。」

「ん。」

第14話 特訓

「…それじゃあ始めましょうか。」

「うん。」

円形の場所に案内された私は早速黒い大剣を生成する。ルシアの方も刀の柄に右手を置き、構えている。

「…。」

「…。」

ルシアと戦うのはこれで4回目。1、2回目はアツシユを通して、3回目は追い詰められて予備の剣で戦った。

「… どうしたの？来ないならこちらから行くわよ。」

「… いいよ。」

——今回は本気。サブ武器とはいえ得意な大剣での勝負。アツシユを通さない純粹な勝負。

「ふッ…！」

——ギイインツ!!

「はアツ…！」

10何mもあつた距離を一瞬にしてゼロにしたルシアの上段から振り下ろされる刀を左腕に擦らせて逸らし、右手に握る大剣を真横に振り抜く。

「甘ッ」

——ドゴンツ!!

「うにゅっ!？」

——ガギイイツツ!!

当然避けられ、大剣を下から蹴りあげられる。さらにそのできた隙を突いてさっきよりも断然重い一撃を繰り出してくる。なんとか大剣の腹に隠れて防ぐが重すぎて結構弾かれちゃった。

「… 良く見えているようね。」

「ありがとう。」

「でももつと動けるはずよ。」

「… がんばる。」

もつと動ける… もはや瞬間移動してるルシアみたいに動けるかな…？ 私は受け身だからあんまり動かないし素早く動くのには慣れない。

「…。」

「… 分かった。」

納刀して指をクイツと曲げるルシア。これはチヨーハツというもので合ってるよね？初めて挑発されたかもしれない。ならば期待に応えてこちらから攻めるべきだろう。それが多分クンレンなのだから。

「ふッ!!」

——ギイインツツ!!ギイイインツツ!!

「いいわ、その調子。」

もはや刀すら抜かず金属製の鞘で受け流されている。鋭くなるように造ったから攻撃力はあると思うんだけどなあ？やっぱり技術の差ってやつ？

「パニシングの力を使えば体を軽くしてルナみたいに浮くこともできるわ。… まあルナが例外で殆どは私たちのように素早く動ける程度だけれども。」

「… だから、まだ速く、動ける、と？」

「ええ。」

大剣を縦横斜め、適当に振り回してその回転率を上げようとする。しかし、ルシアの言う体を軽くするというのが分からない。どうやってパニシングを使って軽くするんだろう…

「貴女が創り出している剣を体に置き換えるだけよ。」

「む、むい…。」

「そうかしら？体にパニシングを巡らせるだけなのに。」

剣は形が変わらないからパニシングをその形に固めちゃえばそれでいい。でも体は固めちゃったら動かなくなっちゃう。

「固めなくてもいいのよ。そうね… イメージとしては自分という人形をパニシングで操る… かしら。そこまで行かないにしろ補助でも十分よ。」

「… にんぎょう…。」

… アツシユのような体だけの存在をパニシングを通して操るように私の体もそうすればいいのか… でも、どうやって…？

——ギヤイインツツ!!… ガギンツ…

「あつ…。」

「今日はここまでね。」

鞘に弾かれて私の大剣は床に落とされる。私はそのまま大剣をパニシングに戻して体内に回収した。

「… 貴女が暮らす場所に案内するわ。」
「ありがとう。」

今日は色々あった。これまでも色々あったけどここまで生活が変わるのは初めてのことだ。でも全てはアツシユを空中庭園から奪い返すために。世界をキレイなモノがない、キタナイモノにするために。

「… ガンバラ、なきや…。」

「… シア? どうかしたのかしら?」

「なんでもない。」

私のシアワセのために。

第14話 ヨリミチ

「…部屋なんて必要ないと思うけど一応ここが貴女の部屋よ。同居人には伝えてあるから何かあれば彼女に伝えて。」

「ドーキョニン?」

「ええ。彼女の名前はラミア。人魚よ。狡猾な所もあるから気をつけて。」

「ニンギョってなに?」

「見たら分かるわ。」

「??」

ドーキョニンでニンギョのラミアっていう人。彼女って言うてるからラミアっていう人は女の人だと思う。どんな人だろうね。あとコウカツな所もあるって言うてたけどコウカツってなに?

「それじゃあまた明日。」

「うん。バイバイ。」

軽く手を振ってどこかに行くルシア。私の興味はすぐに部屋の中に移り、何があるのかを探索する。

「…何も無い。」

部屋に入って探索し始めてから僅か10秒。部屋には特に何も無く、大きな棚や机、椅子、そしてベッドぐらいしか無かった。棚の中にも何も無いし…生活感ってやつがない気がする。

「…ん?」

何やら小さくて細い棒がいくつも連なった小物を見つけた。たしかこれはクシってやつだったつけ。ヒジムが『クシがあれば良かったが… すまないな』とかなんとか言っていた気がする。

「… んー?」

「ダメだよ」

「っ!」

——ギョツ…

「っ!っ!」

クシとやらをじっくり眺めていると何者かから急に後ろから拘束された。気配を感じとれなかった。そして抜け出そうにもその拘束は硬い。機械の身体みたいだけど頭の後ろに当たるなぜか柔らかい何かも気になってしまう。

「これは私の大事なもの… 勝手に弄っちゃダメだよ?」

「… ごめん。」

「ん… 貴女がシアだよな? 話は聞いてるよ。」

相変わらず後ろから拘束されているから頭を上げてその人物の顔を見ようとするが、思うように上げられない。

「… 貴女がラミア?」

「うん。よろしくね。」

「ん。よろしく… 離れてくれない?」

「… さっき私の大事なもの弄ったでしょ。だから暫くはこのままで。」

「… ダイジナモノ。」

「シアちゃんにはあるかな?… この腐った世界に大事なものが。」

ラミアの声が低くなると同時に左手が私の顎に当てられる。

「…抱き心地いいね。」

「？」

「そういえば彼女はとうだった？」

「彼女…ルシア？」

「うん。彼女怖いよね…こう…つり目でルナ様以外信用してないような…。」

「…よくわかんない。」

「…そつか。シアちゃんはそのままできてね。」
「？」

そのまま何も私は私。姿形も変わらないキタナイ機械。だから未だにこの世界で生きている。

「じゃあ一緒に寝ようか。」

「??？」

私の体は宙に浮き、そのままラミアに運ばれる。そして拘束されたまま私はベッドに寝かされた。

「??？」

「どうしたの？何か気になることある？」

「…機械は寝る必要ないよ？」

「そこ？…そうだね。でも気持ちいいでしょ？」

「…分からない。」

キモチイイがなんなのか。無駄なことがキモチイイ事なのか…。それとも寝ることがキモチイイことなのか。ヒジムは人間だったから寝てたけどキモチイイのかな？どちらにせよ私には要らないもの。

「おやすみ。」

「んっ…。」

耳元で話されるとなんだか擦ったい。結局ラミアの姿も見れず、何がなんなのか分からないまま壁を見ることになってしまった。ずっとお腹に手を回されて拘束されてるから抜け出せない。

「??」

… 私は何をしてるんだろう？

私の頭の中で答えの出ない自問自答が繰り返された。

第15話 代行者として

目を閉じるだけ閉じて時間が過ぎるのを待つ。背中に感じるラミアの温かさは私をなんとも言えない気持ちにさせるがこれはどっちなんだろう？

「… ラミア」

「… なぁに？」

「そろそろ離して。」

「ダメだよ… シアは勝手に私の櫛に触ったんだから今日1日抱き枕なの。」

「ダキマクラ…？」

聞いたことない単語が出てきた。

「そう… ここやって…」

「うえ…？」

「… 後ろから抱きしめられる気持ちはどう？ふうく…」

「ひっ…！な、何、これ…？」

耳に息を吹きかけられ、私の背筋をゾワゾワとした何かが駆け抜ける。

「離し、て！」

「あつ… 力強いね… さっきは力抜いてたのかな？」

「…。」

無理やり拘束から抜け出してベッドを降りる。私を拘束し続けたラミアの方を見てみるとそこには目の下に黒い何かがある黒髪の女

がいた。この女がラミアか。なんだか眠そうなヒジムみたいな顔を
している。

「…ニンギョって聞いた。」

「ん？ああ下半身は何にでも変形させられるよ。今は尾びれだけ
ど。ほら、こうやって機械の足を生やすことだってできちゃうんだか
ら。」

「ふうん。」

「露骨に興味無さそうだね。」

「パニシングを操ってる所だけは興味ある。」

「じゃあ私が教えようか？」

「ルシアから教わってるからいい。今はそつちに集中したい。」

「ちえー…。」

頬の部位を膨らませて目を細めるラミア。何が彼女の機嫌を損ね
たのか分からないがまずは目の前のことからしっかりやっていき
たいのだ。

「じゃ、じゃあ練習の成果を私にも見せて！」

「…わかった。」

それなら練習にもなっていないかもしれない。私とラミアは互いに
手を取り合ってギユツと握った。

——。パタ、ン…。

「なんで…？。」

「お話は終わったでしょう？。続き。」

私は再びベッドに引きずり込まれた。

黒い雲に隠れて月すら見えない夜。崩壊したビルのとある階層にて2人の人影があつた。両方共に白髪の少女であり、彼女たちは姉妹の関係であつた。

「ルナ」

「… 姉さん。どうしたのこんな夜更けに。」

「… あの子… シアについてよ。」

「… まあそうよね。」

「ルナはシアをどう思った？」

「… 別にどうも思わないわ。同じ代行者として… 興味はあるし力比べもしてみたいけれど…」

「けれど？」

「… あの子… シアと言つたわね。シアは代行者としての仕事を全く理解してないように見受けられるわ。」

「… そうね。」

「昇格ネットワークの更なる進化のため… 私たちの領域に入ったからには身を粉にしても働いてもらうわ。」

「… ルナが好きなのようにすればいいと思うわ。」

「ええ… それと姉さん。」

「何？」

「シアの過去データ、調べられるかしら。」

「… 華胥を手に入れられればあるいは。」

「ふふっ… 人間って愚かよねえ…。」

普段笑わないルナという少女の口角が上がる。それを見たルナから姉さんと呼ばれる少女も顔を少しだけ緩める。

「姉さんの次の目的地は北だったかしら。」

「そうね… キカイイツカクに興味があるわ。」

「たしかイツカクジラの見た目の機械生物よね？… 計画に直接関係はないけど戦闘に役立ちそうね。」

「ええ。しばらくここを空けるわ。」

「… 気をつけてね。」

「分かってるわ… それとついではあれだけどシアの戦闘訓練… 私の代わりに頼んでもいいかしら？」

「別にいいわよ。ガブリエルよりも強くするわ。」

「ふふっ… 期待してるわ。」

そう微笑むと少女はビルから飛び降り、壁を蹴ってどこかに消えていった。ルナと呼ばれた少女はそれを無表情で見つめた後、踵を翻した。

「——私は代行者として貴女を認めない… シア…。」

第16話 アツシユ

「なんですかこのパニシング濃度は…。」

「約50%ほど侵蝕されていますね…。」

「しかし本当に解体してしまっていていいのでしょうかね？」

「別にいいだろ。このバケモンは動かねえし所有者もいなさそうだからな。」

「嚴重な施設で嚴重な装備で挑む数人の科学者達。彼らはある部隊が回収してきた侵蝕体を外形を残しつつ解体していた。」

「ふむ…。」

「何か分かりましたか？」

「うむ…。恐らくこれは人工的に造られた侵蝕体だろう。普通の侵蝕体よりもパニシング濃度が高く、無理やりパニシングを注がれた痕が残っておる。普通機械体にあるはずの核も胸ではなく頭にあることも信憑性はあると思う。」

「っ、本当ですね。黄金時代に造られた物ではない造りをしてますもんね…。」

物言わぬ侵蝕体の頭を解体し、中のコアを取り出す科学者達はこの機械体を創り出した謎の人物に頭を悩ませた。核融合技術によりテクノロジーが飛躍的に進んでいた黄金時代。AIプログラム「ゲシユタルト」の導入や人類初の超光速スペースコロニー「空中庭園」の建造の立案など科学技術の発展は目覚ましいものがあった。

その特異点はパニシングウイルスという最悪な形で現れることとなつたが…。」

そんなパニシングウイルスに侵され、地球を地獄にした侵蝕体が今、目の前にいる。

「… 同じ轍は踏まぬ。」

「そうですね…。 ですが安全装置の点検は済んでおりますし、緊急停止装置もありますからきつと大丈夫だと思えます。」

「我ら空中庭園とはまた違う技術を持った組織がいる…。 そう考えると頭が痛くなって仕方がない…。」

「アシモフさんに回しましょうか？」

「… いや儂がやる。 あんな小僧に任せられるか…！」

「デスヨネー…。」

「… おい爺さん。」

「誰が爺さ——！」

「——コレ見てくれ。」

「こ、これは…！」

防護服を着たチャラ男といった雰囲気の方が侵蝕体からとある物を取り出した。それは普通の構造体にも使われている発声装置ではなくトランシーバーであった。

「… 今までこの化け物は幼い声がインストールされていたとおっしゃったが… まさか…」

「… 遠隔操作していた、って事ですかね？」

「そうなるな…。」

声を伝達するトランシーバー。それが使われていたということは幼い声とこの侵蝕体は別人であり、裏に誰かがいることが確定したのである。

「やはり裏に大きな組織があるに違いない。」

「ですね…。 そういえばグレイレイブン隊が謎の構造体に出会ったと

報告してましたね。」

「そうじやったな... 確か未確認構造体？α？と名付けられたとか。」

「その？α？と関係があつたりしますかね？」

「... さてな。儂らができるのは解体とその結果、考察の報告のみじゃ。」

「ええ...。」

そう言うのと彼らは侵蝕体の解体に戻った。

解体が終わり、バラバラとなつてしまった機械体アツシュ。目すらないそれは自身の頭に繋がっている機械を睨みつけているようだった。

「.....。」

——パチツ...！

アツシュの中で、パニシングによって芽生えた意識。それはAIと言うにはあまりにも粗末であり、子供のお遊びのようなものであった。しかし...

——ビーンツ!!ビーンツ!!

『緊急停止装...』

『緊急停止装置を解除しました』

『履歴削除完了』

.....

侵蝕することに関してとても強く強いその意識は、着実に、その地に根付くのであった。

第17話 本質

「…。」
「…。」

目の前で浮かぶ真っ白の服を纏う女、ルナ。同じく真っ白い髪を左右に束ねて揺らす彼女は私を見下ろしていた。

「… 姉さんの頼みで貴女の戦闘訓練をする事になったわ。」

「… ルシアはどこに行ったの？」

「任務よ。」

「ふうん。」

なんとというか、空気がピリピリしてしてるような？まあいいや。ルシアの代わりならルナも強いだろうし。私のやる事は変わらない。

「… さあ武器を構えなさい。」

「… 言われなくても。」

私が大剣を構えるのと同時に、ルナは4本の黒い剣を背後に召喚する。彼女自身が浮いてるのもあつて武器が浮くのはソーテーナイつてやつだ。

「私はこれだけで戦うわ。」

「… わかった。」

あの剣4本だけで戦うらしい。ルシアと同じく見えないほど素早ければきつと苦戦するだろう。まずは相手の出方を窺うべきか。

「… まずは1本。」
「… ！」

——ズガアアンツツ!!

大剣の腹で飛来してくる剣を受け止める。… 敢えて受けてみたけど私が4歩程度後退りするぐらいには威力が高い。逸らす方向でいこう。

「もっと増やすわよ。」

「望むところ… ！」

——ギギギインツ！ガガギインツ!!

踊るように振り回される剣達。四方八方からの剣戟に私は受け止めるだけで精一杯だった。

さつきルナはこれだけで戦うと言っていた。つまり他にも攻撃手段はあるという事になる。そうなればルシアと同じくルナにも勝てないのか。

「… つまらないわね。」

「… ツマラナイ？」

「はあ… 貴女パニシングのこと何も分かってないのね。」

「… うん。この世界のこと、何も分からない。」

「… そう。今日はもうおしまい。」

「え？」

「… 貴女は意識海で対話でもなんでもするといいわ。」
「… 」

そう言い捨てて自分で創り出した空間(?)の中に消えるルナ。私は1人取り残された。

「対話…。」

その場に座り込み、目を閉じる。前にもあったな… たしかアツシユを創り出す前、大剣をパニシングに晒した時だったかな。

—
—
—
—
—

— イイイイ…。

誰かの声がそこかしこから聞こえてくる。女のものや男のもの。大人や子供の様々な声。焦る声や叫び声、怒声、そして悲鳴。ドロつとした黒い何かの世界を塗りつぶす。キタナイモノを集めた世界がそこにはあった。

「貴方は何者？」

「…。」

「… 前にも聞いたけど、答えもらってない。」

「…。」

「… 分からない。貴方が、よく分からない。」

もはや踏みしめる地面もなくドロつとした黒い何かは私の膝の下まで侵蝕している。

「… ん？」

私を中心にグルグルと渦を巻き始める黒い何か。どんどん黒い何

かが私の体を飲み込もうとしてくる。私は何も出来ず、ただその波に飲み込まれるしかなかった。

『お前の心にあるものはなんだ？』

『… わかん、ない』

『お前が望むものはなんだ？』

『それは… 世界を、キタナイモノ、に』

『もう一度問う。お前が本当に望むものはなんだ？』

『…：… わか、んない、よ…：。』

『ならば見つけ出せ。それがお前を動かす力となる。』

—
—
—
—
—

『…：… はっ…： あ…： はあ…：。』

なんだか、変な感じだった。あの波に飲み込まれた後の事は覚えてないけど…： 何かを探さないといけない気がする…：。

『…： 外、行く。』

なんだか気分が悪くなってきた。

第18話 赤潮

相変わらず黒い空の下。ここに来てから初めて外に出てみたけどやっぱり私の知らない場所だった。崩壊したビル群の中をぼんやりと歩く。

体がぐちやぐちやになってたり頭が潰されてそのままにされているコーゾータイやそこら辺を徘徊する侵蝕体。なぜか私を襲ってこないがそれならそれで壊す必要も無い。

「…この世界は、なんなんだろう…。」

前の世界の事もあまり知らない私。この世界の事もよく知らないことばかり。ヒジムから聞いていても全部を聞いたわけじゃない。

「オーゴンジダイ…。ガブリエルが言ってたっけ。」

パニシングが発生したのはオーゴンジダイに起こった事故が原因だとか。オーゴンジダイについては知らないけど今よりよっぽどサカエテイタらしい。

「これが…。」

いつの間にか郊外まで来てしまっていた。そして目の前に見える赤い液体。これがパニシングの塊、ラミア曰く赤潮らしい。とんでもなくパニシング濃度が高い。

「…?。」

私を手で触れると手にまとわりついてくる。慌てて振り払ってもう着いてないかを確認する。ちよつとゾワゾワってしてキモチワル

かった。

「…これはキタナイモノ。」

キタナイモノならば神に摘み取られることはない。

「…少しだけ練習しよ。」

パニシングを自由に操る練習。ルナの4本の剣を操る姿を見て、凄いなと思ったから私も練習してみる。

「むむ…むう…！」

体外にパニシングを放出するのは簡単だ。剣にも纏わせることができたしね。でもそれを体内で循環させるのが難しい。

「…はあ…。」

手詰まり。アツシユの為に、世界をキタナイモノにするために強くならなきゃいけないのに。なんで…ダメなんだろう…

——ザザアアンツ…

目の前の赤潮が大きく揺れ出す…。さっきまで動かなかったのに。どんどん迫ってくる波。後退りする私の足を飲み込んだ。

「うわ、わ…うぶっ…!？」

抜け出そうとするもなぜか足が動かせず、私は勢いそのままに転んでしまった…。その際にちよつと赤潮を飲んじゃった。

「うえ…：なんか…：変な感じ…：。」

——ザザアアア…：ン…：

波が引いていく。そして何事も無かったかのようにシンとなった。一体なんだったんだろう…：それよりも赤潮を飲んじやっただけど大丈夫かな？まあでも今のところなにも起きてないし…：。

「…：帰ったら解剖しよう。」

私のお腹の中に入ってしまった赤潮がどうなったのか。それを調べるためにも早く帰らないと。

「…：ふあ、あ…：。普通の構造体なら飲み込まれて終わるはず。あの子は…：何者かな？」

眠そうな顔でとある少女の動向を観察していた白髪の男。地球奪還作戦の主要チームの1つ、ストライクホークのメンバーである彼は赤潮について調べていた。

「…：が、まさか耐性のある子が見つかるとは。隊長にでも報告しませうかね…：。ふああ…：。」

「おいバンジ！なんでそんなところで寝てんだよ！ほら早く来い！」

「ちえ…：あと24時間。」

「次の日じゃねえか!？」

「…：…：赤潮、ねえ…：。——下らない。」

「ガブリエル、入る。」

「ええどうぞシア様。」

ガブリエルの研究室に入って奥の部屋に向かう。私の体を解剖したいから腹部を観察できる機械が欲しいんだけど…。あつたあつた。寝転がってメス？とやらを使って私の腹部に穴を開ける。循環液が飛び出てくるが同じA B型の循環液が用意してあるから大丈夫。胃にメスを差し込んで機械を操作して中をのぞき込む…。あれ？

「無くなってる…。吸収された…。？」

やっぱりガブリエルの言っていた通り赤潮はパニシングの塊だった。そうでなきや体に吸収されるのが速すぎる。

見るものも見たことだし胃の穴を機械で接合し、腹部の穴も塞ぐ。ガブリエル曰く体が特殊な素材だから換えが効かないけどその分優れたものらしいから無理矢理な接合も上手くいってるんだとか。普通のコーゾータイならもつと沢山の機械に囲まれるらしい。

「……………あ。」

ついでに体の中に配線通せば良かった…。